

## 旭川市南土木事業所

延長23,192mの流雪溝が  
快適な冬の生活を支えています

山本 博 所長

## あさひかわ冬プランの一環として推進

旭川市では、北海道開発庁が進める「ふゆトピア事業」や北海道の「利雪、親雪プログラム」等と連携を図りながら、「旭川市ふゆトピア構想」による『あさひかわ冬プラン』を推進しています。この事業の一環として行われているのが旭川市中央地区流雪溝計画です。この計画は平成2年度からスタートし、市内中心部1条通から5条通までの5路線10系統で延長23,192mの流雪溝を設置する事業です。現在まで1条通(道道)、2条通(市道)、4条通(国道)が完成。平成11年までに5条通(市道)、平成13年までには3条通(市道)が完成する予定です。延長23,192mにもわたる流雪溝は道内でも最大のもので、また、暗渠式流雪溝(ボックス幅0.6m×高さ0.8m)の規模としても群を抜いています。

旭川市都市建設部の雪対策室と南土木事業所では中央監視室を設け通年にわたり流雪溝を監視するとともに、維持管理を行っています。運営開始前からこの事業と深くかわり、快適な道路環境づくりを目指す旭川市南土木事業所の山本博所長に、まず流雪溝の特徴から伺ってみることにしました。

「ご存じのように旭川は1級河川の石狩川水系にあり、昭和初期には防火活動に川の水を利用していたという背景があります。水道消火栓が整ってきたことで防火対策はさらに安全になりましたが、毎秒1.6トンもの水をただ流すのではもったいない。せっかく水利権もあるのだから、2次利用しようということで流雪溝という発想に結びついたんです。忠別川から取水した川の水は自然流下によって流雪溝を流れ、本流である石狩川へ。こうした展開は、ほかの都市ではみられないと思います」

## 市民と行政が手をつないで雪の悩みを解決

これまで冬期間の道路の除雪は、行政が中心となって行ってきました。雪が積もると市民は除雪車が来るのを待ち(あるいはまだ来ないと電話をしてくたり)、除雪車が通り過ぎた後は雪山が残るという状態です。道幅が狭くなるので交通渋滞をまねき、どこの自治体もこの問題には頭をかかえています。けれども旭川市では、流雪溝が誕生したことで状況も良い方向へ変化しています。除雪車が寄せていった雪を、今度は市民が協力しあって、スノーダンプ等で投雪し道路もスッキリ。車の流れもスムーズです。行政と市民との信頼関係もより密接になりました。



もちろん全くトラブルがなかったわけではありません。流雪溝にも投雪量の限度というものが有り、ルールを守ってもらうために市では利用マニュアルを配布しました。投雪口が同時に利用できるのは約100メートルごとに左右各3ヵ所までで、一度に大量の雪を投げないようにと注意を促しています。ところがまだ運用が開始されたばかりの頃、除雪車が去った後の雪山を皆でセッセと流雪溝に投雪し始めたからさあ大変。「水が流れてるんだからいいじゃないか」と思ったようですが、すでにオーバーワーク状態で、とうとう流雪溝が詰まってしまい水が道路に溢れ出して、その水が凍って路面がツルツルになってしまいました。

「市民の皆さんの期待が大きかったんでしょうね。放送をかけたんですよ、止めて下さいって。しかし、全然止める気配がなくて…。人間で例えていうなら血管にコレステロールがたまった状況でしょうか」

結局、1度完全に水を止めて復旧に3日間を要しました。厳寒期の事故だけに苦労も多く、また、市民もこの事故を契機に無理な投雪をしなくなったそうです。

このほか、利用時間を午前6時から午後9時30分までと定めていますが、流雪溝の蓋に鍵をかけるわけでもなく、水も流れているので利用できないわけではありません。「まあ、いいか」と思う人も中には。しかし夜間の事故は対処が大変です。また、石狩川に流す前にはゴミを除去していますが、ポイ捨てのアキ缶が減ることはないようです。

市民から寄せられる声の代表的なものとして、女性やお年寄りからは「雪が固いので、投げるのにひと苦勞する」「蓋の開け方がわからない」「蓋が開けづらい」等。ドライバーからは「ショベル等が車道にはみ出して危険だ」というのがあります。

事業所内の中央監視室では、監視カメラで流雪溝や周辺を24時間体制で監視しています。また、事故が発生した場合に現場に放送を流すことやゲートを閉める操作を行います。

「とにかく冬は体力が勝負。流雪溝の監視はもちろん、除雪作業は時間を問わないので、私を含め職員が夜遅くまで残業することや朝の2時に事業所に出ることも珍しくありません。市民の足を確保するのが務めですからね」

旭川市全体では、民間も含め除雪車は約1000台。管理延長は2000km強で、そのうち、南土木事業所として約1100kmを管理しています。また、市民からの除雪の問い合わせは一昨年で約8000件、昨年は約4000件きています。もちろんこれはつながった分です

が。1日中電話が鳴りっぱなしで、その対応に追われる日もあるようです。

除雪に関する苦情として「玄関先に雪を残していてもらっては困る」というものもあれば、「さっきは車があって除雪車が入れなかったが、会社に行って今はもう車が無いから、これから来てほしい」というものまで様々です。

冬期間は除雪が中心になりますが、それ以外の期間は補修工事など、仕事は広範囲におよびます。いつでも快適で安全な道路を維持するために、民間の業者さんと力を合わせて頑張っていますが「維持管理は、工夫を凝らさないと財政的にも厳しくて」とチラリと本音をのぞかせていました。



### 故郷旭川を住み良い街にしたいですね

終始笑顔で取材に応じて下さった山本所長は、旭川生まれの旭川育ち。「旭川は四季がはっきりしているので季節にメリハリがあり、また、一定の土木施設が整い地震や水害などの天災の少ない暮らし易い安全なところが魅力」といいます。

「ずっと土木技術系の仕事をしているわけなんですけど、土木は自然が相手なのでとてもダイナミック。もちろん大変なこともありますけど、懐が大きいというか、許容範囲の大きいところがおもしろいと思います」

愛してやまない故郷の旭川を、もっともっと住み良い街にしたい。そんな情熱がひしひしと伝わってくるようです。

いよいよ、夏の間は水を止めて一時休養状態にあった流雪溝がまた活躍する季節がやってきました。除雪の仕事も待っています。山本所長は池波正太郎や司馬遼太郎の時代小説が大好きですが、冬期間は仕事優先でなかなか自分の時間がとれず、好きな本が読めないのがちょっと悩みのようです。